



念仏者の実存 親鸞の思い

今年も親鸞聖人の「報恩講」をお迎えます。報恩講は、浄土真宗のお念仏の教えを開いて私たちにお示し下さった宗祖親鸞聖人のご苦勞を偲び、み跡をお慕いして営まれる私たち門信徒にとってもっとも大切に勤められるご法要です。

* * *

親鸞聖人と聞けば、意志の強い論理的な方という印象を強く持たれていると思います。しかし、亡くなられてから750年を経て今もなお、門信徒のみならず日本人の中に、その思想、人間味、カリスマ性が輝き続けているのは、強さの反面、実に多情多感で、常に体でものを感じた方であり、その体とは「世の中」そのものであったからではないでしょうか。

自らは、教祖になろうとも、教団を作ろうとも、寺を建てようともされなかった、生涯自分の家も持たず、「非僧非俗」として生きられた親鸞聖人のよるこびも悲しみも、常に市井の中にあって人々とともにあることでした。

自分独り救われることを求められたのではなく、一切の衆生が救われなければ、我が身にも

救いはないと、自己を悲しみ、世に訴え、時にははげしく世に怒り、自己にも世の中にも決して妥協はされませんでした。

しかし、その激しさ厳しさは暴力や革命には向かわず、常に自身への悲しみとなって自分自身の上に立ち返り、「世の中安穩なれ」と願う穏やかな念仏生活とともにありました。

そして、それまで一部の選ばれた人たちや、国家維持のためであった仏教を、自分自身を含めた悲しき者たちに、人間の平等な尊厳と安心の中に生きるよるこびを示されたご生涯でした。

* * *

今日社会を賑わす騒動には、正義、平和、自由、真実、平等などの立派な言葉はあっても、実際の行いや証はなく、単なる抽象的な大前提にその言葉を使って（利用して）、言葉だけの争いに終わってしまっているように思われます。

それは、ただ空虚に言葉だけが飛び交い、正義のためと称して人を傷つけ、自由と称して他の自由を侵し、それらの言葉のもつ本来の意味や素晴らしさを冒瀆することにもなっていて、末法の世そのものです。

**釈迦如来かくれまして
二千余年になりたまふ
正像のにじはおはりにき
如来の遺弟悲泣せよ**

破壊もかなわぬ自身のみじめさに対する悲しみ、深い自己内省、親鸞聖人の「さけび」の和讃です。

親鸞聖人は末法だから戒を破って妻子を持ったのではなく、いよいよ自分の愚かさを知り、日々それぞれの生業に勤しむ人々の心を知って共感し合うことができ、自分独り救われる道を求めるのではなく、世の人々と共に救われんことを求められ、そのためには、先ずこの親鸞が救われなければならなかったのです。その実践がお念仏のご生涯だったのです。

無辺の生死海を

**尽くさんがため、
前に生まれた者は後を導き、
後に生まれた者は前を訪え**

親鸞聖人の「とぶらえ」は「弔え」ではありません。「訪え」と書かれた意味の深さを味わい忘れてはなりません。

人はみな、願い合い、共感し、うなずき合っていなければ生きてはいけません。私の横にも無数の人が居り、前にも、後ろにも、限りない人々が続いています。私たちはその流れの中の一人として、人生をお念仏に生かされながら、人に導かれ、また人を導けるように歩んでいきたいものです。

奏庵法座
親鸞聖人報恩講

11月26日(土)
午前11時～
「真宗宗歌」
正信偈
住職法話
御俗鈔拝読
ご文章
「恩徳讃」
～*～
おとき
抹茶お接待

親鸞聖人のみ教えに生きるお寺にとって、報恩講は何より大切に勤めさせていただいてきた法要です。生まれ育ったお寺、奉職していた本山、別院、カナダの報恩講、そのどれもが温かい思い出です。昨年の癌を得て声も出ず、病の行く先もわからない中での報恩講もありがたいものでしたが、おかげさまで今年は安定した体調で迎えさせていただけます。皆さまのお参りをお待ちしています。



心で称えたい
親鸞のことば

一人居て喜ばは
二人と思ふべし
二人居て喜ばは
三人と思ふべし
その一人こそ
親鸞なり

「一人で念仏を称えて、喜びを感じるなら二人いる。二人で念仏を称えて、喜びを感じるなら三人いると思いなさい。そのうちの一人は親鸞です」

親鸞聖人が臨終の際に語ったとされることばで、「御臨末の御書」の中にあります。

死して肉体は滅ぶとも、極楽浄土にあって仏となって、つねに念仏を称える衆生を導き続けて下さっています。

五劫思惟の苗代に
兆載永劫にしろをして
一念帰命の種おろし
自力雑行の草をとり
念々相続の水を流し
往生の秋になりぬれば
このみとるこそうれしけれ
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
(親鸞聖人田植え唄)

御伝抄
息のみ聞きて
お取越し
御絵伝を
しまふ安らぎ
報恩講
(文子)

東日本大震災による巨大津波でほとんどの学童の命が失われた大川小学校の一部の父兄が、教師や市の責任を訴え勝訴したが、市側は即控訴した。その市長の「先生の責任…あまりにつらい」の「つらい」の言葉に共感する。反面訴えた側に選ばれた言葉、「先生の言うことを聞いたのに」や「子供達の声が届いた」には、今や声なき子供たちや先生の悲しい姿が浮かぶ。■「なぜ子供達は死ななければならなかったのか」、その不条理はあまりにも痛ましいが、それは、予想をはるかに超えた巨大津波が襲ったことにすべての因があり、先生や市のせいにするのは「この悲しみを他の人に味あわせたくないから」という大義にそぐわない。それを願うなら、亡くなっていった人の口を借りたり、理不尽な責任を問うより、子供を救えなかったことに苦悩する親の思いをしっかりと訴えてほしかった。そうすれば聞く人々に共感と心からの同情を生んだに違いない。■他人の口、特に亡くなった人の口を借りて言うのは、たとえ正論であっても人を不快にする。五輪競技場新設の正当化に登場した元五輪選手に、亡きキャプテンの形見を身につけていると涙ながらに語らせるのも、隣国の将軍に言わせられている脱北者に似て、痛々しく空々しくもあった。■嫌われ者同士の最悪の戦いと言われたアメリカ大統領選を制したのは、政治家ヒラリー氏ではなく、下品だけと思ったまますを口にするトランプ氏だったのは、アメリカの良識をつくってきた特権階級の「嫌味」への反発の現れだと思う。■正直はよいことだとされるが、思ったまますを口に出すのはよしとされないし、はからいはたしなみでもあるが、ずるさでもある。今回の選択は、嫌われるアメリカにも健全(?)な人間が残っていたということだが、健全な人間は軽くチョイ悪なのが案じられる。

Norimaru